郷土の民謡学習の意義と教材性

～〈長岡甚句〉の授業実践から～

伊　野　義　博*・中　村　正　之**

Ⅰ　はじめに

本稿は，郷土の民謡学習の意義と教材性について，新潟県長岡市に伝承される民謡〈長岡甚句〉の中学校1年生を対象とした授業実践を通して明らかにするものである。また，本実践を，郷土の民謡学習の一方法論としても提案したい。

1「郷土の民謡」の学習と教材性をめぐって

民謡をはじめ，民俗音楽を学校の音楽授業に取り入れることに関しては，すでに多くの研究や実践がある。加藤（1993）は，1970年以降1993年までにおける音楽教育関係の主要雑誌等で報告された60余りの教育実践を分析する中で，民俗音楽の教材性を「親近感」「音楽性の覚醒」「音楽的特性」「文化的特性」「郷土理解」「社会性」としてまとめている。ここで指摘される教材性は，本研究で対象とする「郷土の民謡」にもつながるものである（p.35）。

授業における民謡の指導法として，垣内・笠松（1991）は，小学校における〈斎太郎節〉の実践から提案をしている。授業の流れを筆者なりにまとめるならば，次のように整理できる。

①範唱テープを聴取する。②気付きを意見交換し，特徴を把握する。③教師の歌を丸ごと真似る。④「節回し・掛け声」に着目し，範唱テープを聴く→気付きを書き込む→範唱テープで確認する。⑤身体動作を工夫しながら練習する。⑥「節回し・掛け声」に着目し，身体動作とともに表現する。⑦発表し合い，曲の特徴を捉えて発言する。

ここからは，授業構成として次のような特徴が浮かび上がってくる（伊野 2010,p.20）。

①教材を丸ごと受けとめ，規範に近づけようと真似て，練習を繰り返す。②範唱を何度も聴き直し，それに近づけるべく表現を工夫しながら思考，判断していく。③「節回し・掛け声」といった教材の特徴的な性格を捉え，着目して学習する。④身体の動きを伴った学習を行う。⑤学習者の多様な気付きを集約，整理し，学びを共有する。

民謡に限らず日本の伝統音楽の授業構成の基本として，伊野（2010）は，①教材の丸ごとの体験，②教材体験の中での試行錯誤，③言語化・新たな認識といった枠組みを提案し，「観察・模倣・繰り返し」「身体を通してわかっていく」方法を通した学びの構造を示している（p.21）。

民謡は現在の児童，生徒にとって必ずしも身近なものとはいえないことから，授業で扱う困難も指摘されている。桂（2000）によれば，中学校で講師を招き民謡の授業を計画し，１時間目に秋田民謡のビデオを視聴させたところ，「生徒は拒絶反応を示し，民謡を歌うのを嫌がった」という。これに対しては，教材である〈秋田おばこ〉の「ハー　オイサカサッサ　おばこだおばこだ」という「合いの手」の部分を生徒が喜ぶことに

2014.11.14　受理
* 新潟大学教育学部
** 新潟大学教育学部附属長岡中学校

着目し，交代で「合いの手」をかけることで，曲自体の面白さに導くことができた（p.28）。この事例は，「合いの手」を持つ音頭一同形式の民謡の特徴が，生徒の興味関心を促し，歌うことを活性化させることを示している。

「合いの手」や「囃子詞」が，学習者の気持ちをやわらげ，歌の世界に自然と導くことは，他でも報告されている。山内（2014）は，民謡の授業において，リラックスした中で，「ハァ，ドッコイ」「ハァ，コリャコリャ」などの囃子詞を全員で入れると「内気な子供もみんな歌えるようになる」と指摘する（p.62）。こうした効果は，筆者も学生指導や講習会で実感しているところである。

民謡の声は，話しことばを基本とした発声であるため，歌い手自身の持つ個性的な声を生かして歌うことができる。山内（2014）は，話している声をうたにしていくことをはじめてから，「それまでいわゆる合唱曲を歌うことに苦手意識をもっていた子供たちが，『自分はこの声で歌えばいいんだ』と自身をもって堂々と歌い，心を開いて，うたが好きになり，自己肯定感が高まっていく」と述べる（p.60）。

本題材のもう一つのキーワードである「郷土」について，筆者はすでに次のような検討してきた（伊野 2003）。すなわち，「郷土」とは，「①生まれ育った土地。故郷。②（複合語の中で）その地方（特有）。（―芸能）」を意味する（西尾他編 1988）。また，民俗学者の柳田は，「郷土は其實質に於て故郷郷里，乃至は生れ在所といふ言葉と，格別の相異を持って居ない」とし，「其文字通りに萬人が萬人とも，一つづゝ持って居るという心持に，使用せられることが出来たのである」と述べる。「郷土」は生まれ育った場所であり，みんなが持って居る心持ちにさせられるものである。いわゆる，「誰にも故郷がある」といった意味と気持ちで，ここに「郷土」の原風景を見ることができる。「郷土」は，人が生まれ育った土地であるとともにそこに向かう心的方向性が伴うものと言って良い。こうした郷土意識について柳田は，「ちやうど小兒といふ語がその一般的な可愛さを我々に味ははしめるやうなもので，比べて見るならば無論我兒の方が心を惹くが，さりとて數多のいたいけな者を，只何でも無く見過ごすことは不可能である。この気持ちを以て御互ひが，他人の郷土を視る気になつたのは其頃からであった」と述べる（柳田 1981,p.49）。我兒はもちろん可愛いが，我兒のような可愛い子が他にもいてそれをいたいけだと思う親がいる。このようにして郷土は，相対化される。前述した「郷土」の複合語として「郷土芸能」は，このような「あの人にも郷土がある」という相対化の視点により成立する。本稿でのべる「郷土の民謡」も同様の性質を持っている。そして，このような考察を経て筆者は，「郷土」の語を，「そこで暮らしている（あるいは暮らしてきた）人々との過去から現在におけるかかわり，といった点から捉え直し，その上で他の人々の郷土を相対化していく視点を持つ」ことの必要性を論じた。そして，「郷土の音楽」の教材性をはつまるところ「音楽の『自分』へのつながりを実感させ，『自分』からの拡がりを展望させるための教材としての価値」と捉えている（伊野 2003,p.163）。

２　〈長岡甚句〉について

〈長岡甚句〉は，新潟県長岡地域で歌い継がれてきた民謡である。戦前までは，盆踊り歌として歌われてきた。代表的な歌詞には，次のようなものがある。音頭一同形式による歌で，下線部が音頭，波線部が一同となっている。また括弧内は，囃子詞である。なお，音楽的特徴の詳細については，伊野（2007）を参照されたい。

ハーアエーイヤー　長岡柏の御紋（ハーヨシター　ヨシター　ヨシター）
七万余石のアリャー城下町　イヤーサー余石のアリャー城下町（ハーヨシター　ヨシター　ヨシター）

盆踊り歌としての庶民の歌の他に，長岡藩士によって歌われた御家中節もあり，節回しが異なり「唄い方が雄渾で踊りの形もきわめて壮快，しかも飄逸洒落の趣」（奥倉 1982）があったとされる。また，この歌は座敷でも歌われ，日本民謡大観には，昭和18年収録の玉勇，玉菜，小波による演奏を聴くことができる（日本放送協会 1992）。

戦前までは，それぞれの地区で多様な形で歌い踊られていた〈長岡甚句〉は，戦後「統一甚句」として様変わりする。これは，終戦後に長岡市と長岡商工会が，復興を祈念した全市をあげての祭り「長岡復興祭」を立ち上げた際，民謡流しを実施するために行われた作業である。その際「各地の笛の名士から集まって戴

くことになり，宮内町，蔵王，大工町，神田囃子，四郎丸，川崎，浦瀬地区，川西地区等から，笛の名人と称される方達十五，六名，集まっていただき，囃子の一節ずつ吹いていただいたが，同じ節は一つもなかった」という（奥倉 1982）。このように，本来の音楽はそれぞれの歌い手や奏者の強い個性をもっていた。

盆踊りは，本来盆に招かれた精霊を慰めることから、先祖をはじめ自分たちとつながりのある精霊を迎え、共に踊り共に送る。秋田県羽後町西馬音内では、頭巾や笠で顔を隠した「ひこさ頭巾」という踊り手がいるが、地元では、盆に返ってきた亡者であると言われている。〈長岡甚句〉もこのような盆踊りであった。そしてこの基本的な精神は現代にも受け継がれている。すなわち，長岡では，第二次大戦時，長岡大空襲のあった８月１日に市民による民謡流しが行われるが，そこには，1470余名もの失われた命に対する鎮魂と復興の願いを込められている。近年では，映画「聯合司令艦隊長官 山本五十六」や「この空の花ー長岡花火物語」にも挿入されている。このように〈長岡甚句〉は，土地の歴史や人々の思いと深くつながり歌い継がれてきた。

３　授業実践にあたって

以上の検討を押さえつつ，平成26年，新潟大学附属長岡中学校1年生を対象に「郷土の音楽〈長岡甚句〉を歌い味わおう～自分の声で表現する魅力」を題材名として，授業実践を行った。授業者は，同校教諭中村正之である。

本題における，郷土の民謡〈長岡甚句〉の学習の価値を次の３点に押さえた。

① 自分や友だちの声の良さに気付き，自分のもつ声を生かして歌う。
② 異なる様式の表現方法を追求し，伝統的な歌い方としての民謡の表現を学ぶ。
③ 郷土の民謡としての〈長岡甚句〉の良さを捉え直し，発信する。

また，授業は次のように構造化される。

① 郷土の民謡としての長岡甚句の学習（文化的，歴史的背景を学ぶ）
② 自分の声への気付き
③ 声の表現としての民謡の学習
④ 師範の演奏に「浸る」→「模倣」→「協働」（交流・表現の工夫）→「振り返り」の授業構成
⑤ 授業における学びの拡がり

これらの詳細は，後述する。

さて，ここで特徴的なのは，授業構成である。

郷土の民謡に限らず，日本の伝統音楽の学習や民族音楽の学習においては，規範となる音楽を丸ごと模倣することの有効性が説かれている（伊野2010など）。本題材で教材とする〈長岡甚句〉も師匠の演奏の模倣をまず最初の学習形態とした。また，民謡における個人の表現の多様性や男女差を考慮し，複数の師範（音源）を用意した。生徒は，それぞれ規範とする師範（音源）を選択し，個々の表現を追求していく。

授業ではその構成を伊野（2010,p.20）の提案を基本としながらも，そこに「協働」の場面を位置付けた。ここでいう「協働」とは，児童，生徒が「互いに問題の解決や願いの具現のために取り組む過程を共有する中で，資質・能力を働かせながら互恵的にかかわっている様相のこと」である。「自分と他者が共通した願いや目的でつながっていることを感じる状況」をつくることで，互いの表現を認め合ったり，良さを見出したりして，「協働」による学びが高まることを期待している。新潟大学教育学部附属長岡校園では，このように「協働」場面が位置付く学習を「協働型学習」とし，題材内に有効に位置付けようとしている（新潟大学教育学部附属長岡校園 2014,p.26）。

一般的な民謡学習においては，師匠の規範の模倣を繰り返しながら，上達に至るが，教科音楽においては，授業という集団性を活用すれば，共通の願いのもと，他者の気付きや表現の仕方から多くのことを学ぶことができる。また，個々の歌声や表現方法を認め，生かし，自身の個性的な表現につなげることも可能となる。「協働」場面におけるこうした学びは，個を生かす民謡の表現に有効に作用するものと考える。本題材では，ペア学習から次第にグループによる学習になるように計画した。

師匠
↓↑←模倣
学習者
（個）
一般的な民謡学習

師匠
教師の支援→↓↑←模倣
学習者
（個←認める・見出す→個）
「協働」の場面における民謡学習

Ⅱ　授業実践

１　構想

１）題材名と教材

題材名「郷土の音楽〈長岡甚句〉を歌い味わおう～自分の声で表現する魅力～」（１年）

教材名　民謡〈長岡甚句〉（新潟県長岡市）

音源　①長岡市民謡協会によるＣＤ（男性）（長岡市民謡連盟「長岡市民謡連盟10周年記念〈長岡甚句〉」）
②長岡市民謡協会によるＣＤ（女性）（同上）
③北島三郎によるＣＤ（「長岡大花火音頭」C/W長岡甚句 CDP－839 CROWN）

２）本題材の価値

本題材を学ぶことの価値を，主に３つの視点から主張したい。

①　自分や友だちの声の良さに気付き，自分のもつ声を生かして歌う。

中学校最初の題材では，生徒が自分の声の良さを実感したり，特徴を認識したりすることが大切と考える。そのために，まず，声の個性を認め，話し声を生かした声の出し方で歌うことのできる教材，生徒それぞれの個性的な歌い方を認めることのできる教材が必要である。それには，民謡が適切であると考えた。生徒が交流し，互いの声や表現の仕方を認め合う場を設けることにより，これ以降の学習において，自分の声に自信をもって表現活動に臨み，音楽の楽しさを味わうようになるであろう。

②　異なる様式の表現方法を追求し，伝統的な歌い方としての民謡の表現を学ぶ。

合唱に臨む時と民謡を歌う時では，音楽へのアプローチの仕方が異なる。例えば合唱では音色やピッチを揃えることが重視されるが，民謡では歌い手それぞれの声の特徴が尊重され，そこに良さや味わいがある。また，合唱では発声の仕方やポイントを全員で揃え，響きを整えることが重視されるが，民謡では一人一人の自然な声が出発点になる。歌い方（節回しやコブシの入れ方，間の取り方など）も歌い手によってそれぞれ差がある。そもそも民謡は「可変的であり，多様性を持ち民衆の中で育まれて」（伊野 2007,p.61）きた。このような点から，「合唱の声の出し方や歌い方とは異なった歌い方があるのだ」という学びをさせたい。

③　郷土の民謡としての〈長岡甚句〉の良さを捉え直し，発信する。

郷土の民謡は，耳にする機会こそ少ないが，生徒の日々の生活の中に存在する。〈長岡甚句〉の場合も毎年８月になると市民による民謡流しが行われる。〈長岡甚句〉を学習対象とすることで，声の音色や節回しなどの音楽的特徴を掴み，良さを見出すようになるだろう。また，歴史的，文化的背景を学ぶことで，郷土の民謡がもつ価値を理解することにつなげたい。「普段，何気なく接している私たちの町の民謡は，実はこんなに凄いのだ」という捉え直しを期待する。

今回は中学校最初の題材として郷土の音楽に取り組む。生徒にとって身近な郷土の音楽から学習を出発することは，大きな意義があると考える。すなわち，地域の人々の思いや願いと歌との関係を学ぶことにより，歌の良さや意味を実感するだけでなく，自分が地域とかかわる視点を得たり，歌を通して人とつながることの価値を見出したりすることができる。学校で学んだことを地域の人々や社会に発信し，さらに地域から学ぶサイクルをつくることは，「知の循環」の視点からも有意義だと考える。本実践は，学校での３年間の学びが，地域とのかかわりを出発点とし，地理的にも世代的にも世の中と幅広くつながっていくようなカリキュラムの在り方を模索する出発点と位置付けている。

3）目標

○　師範による〈長岡甚句〉の演奏を聴いたり，互いの歌声を聴き合ったりする活動を通して，

・　自分の声の良さや特徴を生かし，〈長岡甚句〉にふさわしい発声や節回し，声の音色の変化や産字などの表現方法に関心をもって歌う学習に主体的に取り組もうとしている。

・　節回し，音色の変化や産字などを知覚し，それらの働きが生みだす特質や雰囲気を感受しながら，自分の声の良さを生かした発声により，音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて，思いや意図をもっている。

・　自分の声のよさを生かしながら，民謡を歌うのにふさわしい発声により，節回しや音色の変化，産字の歌い方などの表現に必要な技能を身に付けて歌っている。

○　〈長岡甚句〉の歴史的，文化的背景を学んだり，地域の方々とかかわって演奏を発表したりする活動を通して，伝統的な歌唱法や郷土の音楽の良さを捉え直す。

4）授業の構想

本題材の価値を求めるために，主に５つの視点から授業を構想し，下図のように構造化した。

①　郷土の民謡としての長岡甚句の学習（文化的，歴史的背景を学ぶ）

②　自分の声への気付き

③　声の表現としての民謡の学習

④　師範の演奏に「浸る」→「模倣」→「協働」（交流・表現の工夫）→「振り返り」の授業構成

⑤　授業における学びの拡がり

【授業の構造】

問題解決の過程	子どもの状況と教師の主な手だて
願いをもつ （楽曲との出会い）	〈長岡甚句〉が長きにわたり市民によって大切に愛されてきた曲であることを捉え，歌を習得し文化を継承していきたいと考えている。また，〈長岡甚句〉の特徴を捉え，雰囲気を感じ取っている状況。手だては ○長岡甚句と市民とのかかわりについて理解を深めさせ，思いをはぐくむ（映画「山本五十六」，「この空の花」の１シーン，長岡まつりで甚句を踊ることの意味，など）。 ○異なる師範による様々な演奏を用意して聴かせ，特徴を捉え，雰囲気の違いを感じ取らせる。
願いを焦点化する	自分が最も気に入った師範の演奏を選択し，近づくべく練習に取り組む状況。手だては， ○それぞれの師範のよさを考えさせ，最も気に入った師範を選択させる。 ○何度も師範の演奏を模倣して練習させる。 ○節回しや間の取り方，声の音色や発声といった視点をヒントに，何度も繰り返し練習させ，ワークシートに記録させる。
願いを具現化する	「グループで学び合い，自分の表現をもっと高めよう。そして地域の人に発信しよう」という課題を受け，〈長岡甚句〉をより良く歌いたいと願っている点で，「自分と他者とが共通した願いや目的でつながっていることを感じる状況」となり，仲間と交流する目的意識をもっている。 1 場面・目的意識にかかわる手だて ○ペアを組んで表現を交流し合う場面を何度も設け，次時にグループを組んでみたい相手を探させる場面を設ける。
※「協働」場面	互いに演奏し合い，お互いの歌の良さやアドバイスを伝え合い，互恵的にかかわっている状況。音色や間などを再試行して，より表現を高めている場面。 Aさん：もっと楽しく豪快な雰囲気を出したいな。Bさんは産字を力強く歌っているみたいだな。 Bさん：もっと祭りみたいな豪快さを出して歌いたい。Aさんはよく声が出ているな。 交流前 ↓ 大きな歌声。産字の歌い方の良さを伝えたり，アドバイスをする。 ↓ 力強い産字の歌い方。大きな声で歌っている良さを伝えたり，アドバイスする。 Aさん：自分の歌声に自信をもつ（大きな声で歌えていて良いこと）。産字の歌い方を工夫して，もっと豪快な雰囲気を出せた！ Bさん：自分の歌声に自信をもつ（産字の歌い方が良いということ）。一緒に練習することで大きな声で歌えるようになって，豪快さが出てきた！ 交流後 2 交流相手，3 交流させるものに関わる手立て ○「同じ師範を選択」していて，かつ，「一緒に練習してみたい」と願っている生徒同士の４名程度のグループ。交流させるものは，各自の歌声。 4 交流方法・形態にかかわる手だて ○前時までの授業中の観察や生徒の意思をもとに，教師がグループを編成する。 5 記録方法にかかわる手だて ○交流の発話記録（または録画）。 ○交流の振り返りカード（交流して良かったこと，新たに見出したこと）
新たな願いをもつ	自分たちが高めた表現が，どのように聴き手に伝わるか確かめたいと願っている状況。手だては， ○地域の人を招いて発表会を行い，評価をいただく機会を設定する。

①　郷土の民謡としての長岡甚句の学習（文化的，歴史的背景を学ぶ）

生徒は小学校において，〈佐渡おけさ〉などの郷土の音楽を学んでいる。〈長岡甚句〉についても，大半の生徒は運動会で踊った経験があり，馴染みがある。教師が「長岡の音楽と言えば？」と生徒に問うたところ，多くの生徒が〈長岡甚句〉を挙げている。しかし実際に歌った経験がある生徒でも，曲の特徴を捉え，自分なりのこだわりをもって表現したり，長岡市民にとっての〈長岡甚句〉がどのような存在であるかを考えたりする者は少ない。

そこで教師は，〈長岡甚句〉が長きにわたり市民によって大切に愛されてきた曲であることを伝えると共に，歌を習得し伝統文化を受け継いでいく，という課題を設定し，郷土の音楽への気付きを促す。具体的には，歌詞の内容や情景を説明するとともに，長岡空襲で亡くなった先人への鎮魂の意味として「長岡まつり」で歌われる意味を考えたり，映画「この空の花―長岡花火物語」での〈長岡甚句〉を紹介したりして，市民が歌い継いできた歌への思いを理解する場面を設ける。〈長岡甚句〉が，地域の歴史や文化と不可分であることを理解させたい。

②　自分の声への気付き

民謡では各自がもつ自然な声を生かした歌い方が大切にされる。それぞれの個性的な声の良さに気付き，そこを出発点として歌に取り組ませたい。そのためには，授業の中に前述した「協働」の場面を位置付け，生徒が互恵的にかかわる機会を設ければ，互いの声の良さを伝え合い，認め合う姿があらわれるだろう。こうした交流を通して，生徒は自分の声の特徴を認識し，それを生かし，自信をもって歌唱活動に取り組むことが期待できる。

③　声の表現としての民謡の学習

全体の声質や響きを整えながら統一的な声の表現を創り上げていく合唱のようなアプローチとは方向が異なり，民謡は歌い手によって節回しや間の取り方などに違いが見られる。また，発声や声質の違いからくる雰囲気の相違も，それぞれの演奏に味わいを生んでいる。よって，この点について生徒が良さや特徴を感じ取ることが大切である。

このような民謡の性格を生かして歌うために，教師は異なる３人の師範による演奏を用意して生徒に聞かせ，歌い方や雰囲気の違いを感じ取らせる。生徒が「力強い感じや節回しが気に入ったから，私はこの師範のように歌いたい」「お祭りのような華やかさがあって，気に入った。あの師範のような声で歌いたい」といった思いを抱き，各自が自分の思いに合う師範の演奏を選択することを期待する。また，旋律の動きを線で示したり，言葉で説明を加えたりできるようなワークシートを用意する。これにより，コブシや節回しといった旋律の微妙な動きを知覚し，それらが生みだす特質や雰囲気を考える一助となるように工夫する。

④　師範の演奏に「浸る」→「模倣」→「協働」（交流・表現の工夫）→「振り返り」の授業構成

まず，何度も繰り返し演奏を聴き，浸ることができるように音源を準備する。各自が表現を追求する過程では，「模倣」を大切にする。生徒が師範の演奏を何度も聞いて，節回しや間の取り方，声の音色や発声といった視点をヒントにしながら歌を練習していくことになる。ある程度歌えるようになった生徒は，「もっと祭りのような楽しさを出したい」「あのような節回しで歌いたい」など，追求への願いを焦点化してくると考えられる。

その際教師は，「グループで学び合い，自分の表現をもっと高めよう。そして地域の人に発信しよう」という課題を提示し，「協働」場面を位置付ける。そこでは，前時までの授業中の観察や生徒の意思をもとに，「同じ師範を選択」していて，かつ，「一緒に練習してみたい」と願っている生徒同士の４名程度のグループを編成する。これは，生徒が〈長岡甚句〉をより良く歌いたいと願っている点で，自分と他者とが共通した願いや目的でつながっていることを感じる状況をつくることとなる。生徒は互いに表現を聴き合い，「あの人は，産字の歌い方がいいな。私もやってみたい」など，相手の良さを見出したり，アドバイスを伝えあったりしながら，互恵的に交流し，表現を高めていく。

「浸る」，「模倣」，「協働」という学習の構成において，「浸る」「模倣」では，目指すべき演奏を丸ごと受けとめ，音楽の全体を味わいながら学習を進めることを意図している。「協働」場面では，知覚･感受をもとに，グループで交流しながら表現の視点を共有したり，表現の方法を追求して新たなものを生みだすことを目指す。授業の後半では，学びを「振り返り」，自己の認識や価値観，音楽に対する理解の枠組みを更新していく。

⑤　授業における学びの拡がり

学校で学んだことを地域や社会にどのように還元していくか，という視点から，題材の終末では地域の方々との交流の場を教師が設定する。実際に地域で〈長岡甚句〉を歌い継いでいる方々の前で演奏を披露したり，一緒に歌ったりすることで，地域の方々の思いや願いに改めて触れ，地域の良さを見つめ直したり，自分と地域とのつながりを実感したりするだろう。また，地域の方々にとってはこれまでの経験や培った技能を中学生に還元することで，伝統文化の担い手を育てることにつながるだろう。

5）題材の評価規準

観点	評価規準	評価方法
ア　音楽への関心・意欲・態度	①自分の声の良さや特徴を生かし，〈長岡甚句〉にふさわしい発声や節回し，音色の変化や産字などの表現方法に関心をもって歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	観察，ワークシート
イ　音楽表現の創意工夫	①〈長岡甚句〉の節回し，音色の変化や産字などを知覚し，それらの働きが生みだす特質や雰囲気を感受している。 ②知覚・感受しながら，自分の声の良さを生かした発声により，音楽表現を工夫し，どのように歌うかについて，思いや意図をもっている。	発言，観察，ワークシート，振り返りカード
ウ　音楽表現の技能	①自分の声のよさを生かしながら，民謡を歌うのにふさわしい発声により，節回しや音色の変化，産字の歌い方などの表現に必要な技能を身に付けて歌っている。	観察，パフォーマンス課題
エ　鑑賞の能力	①節回し，音色の変化や産字などを知覚し，それらの働きが生みだす特質や雰囲気を感受しながら，〈長岡甚句〉の特徴を長岡の歴史や文化と関連付け，その価値を考えて聴いている。	発言，振り返りカード

6）評価と指導の計画（全６時間）

過程	学習内容	○学習課題と・子どもの学びの姿	○教師の手だてと評価
願いをもつ（楽曲との出会い）　1時間	**〈長岡甚句〉を捉える** ・楽曲の価値 ・節（節回しや間など） ・歌詞の情景の理解	**○〈長岡甚句〉を知ろう** ・映画の中で描かれているなんて，初めて知った！長岡甚句ってすごいんだな！この歌を歌ったり，世界に向けて発信したりすることは価値があるのだな。	○〈長岡甚句〉と市民とのかかわりを知ることができる資料を提示する（「長岡まつり」における民謡流し，映画の中で用いられているシーン） ○歌詞を示し，大意を説明する。
		○〈長岡甚句〉を聴き，民謡の特徴を捉えよう ・声が揺れている！ビブラートが効いている（→コブシ）。 ・声が太くて，良く響いているな（→発声） ・声に張りがあるな（→音色） ・声が強かったり，弱かったりして変化している。（→強弱，声の太さ）	○教師が範唱したり，師範の演奏を提示したりする。 ○〈長岡甚句〉を聴き，感じた特徴について生徒に発言を求め，キーワードで整理する（コブシ，発声，音色，間，節回し，強弱，発音，など）
		○いろいろな師範の演奏による〈長岡甚句〉を聴き比べることで，特徴をとらえ，雰囲気の違いを感じ取ろう。 ・演奏する人によって，微妙に表現が違うな。 ・この師範の演奏は力強い感じを受けるな。声に張りがある。 ・この師範の演奏は楽しい。声が高くて明るい音色だな。	○異なる師範による演奏を提示する。 ・長岡市民謡協会のＣＤ（男性） ・長岡市民謡協会のＣＤ（女性） ・北島三郎氏のＣＤ ○「音楽的な特徴」と「雰囲気」をワークシートにメモさせながら聴き取らせる。 評：それぞれの師範の演奏から，特徴を捉え，雰囲気の違いを感じ取っている。（イ－①，発言，ワークシート）
		○自分が気に入った師範の演奏を選択しよう。 ・この師範の演奏を目指したいな。力強い感じが気に入った。 ・あの師範のように豪快に歌いたいな。	○異なる師範の演奏の聴き取りを振り返らせ，選択させる。自分が特に気に入ったところについて，ワークシートに記入させる。

願いを焦点化する　２時間	**自分なりに表現する** ・節回し ・強弱 ・間 ・発音 ・声の音色 ・コブシ ・産字 ・発声　　など	**○師範の演奏を模倣し，〈長岡甚句〉を歌おう。** ・だいたい歌えるようになった！でも，もっと声に太さを出したいな。 ・節回しはだいたい覚えた！コブシの入れ方が面白いけれど，どうやって声を震わせれば良いのかよく分からないな。 ・この部分の節回しのやり方や間の取り方がどうもよく分からないな。 **○もっと表現を高めよう。誰と練習すると良さそうか？お互いの表現を交流しよう。** ・コブシの入れ方はつかめたが，間がよく分からない。どういうタイミングで歌詞を入れていくといいのかな？Ｂさんと一緒に練習してみたいな。 ・自分では師範の演奏に近づけて，特に姿勢にこだわって演奏しているつもりだが，よく分からないな。同じ師範の演奏を目指しているＡさんの声は良さそうだ。一緒にやってみたいな。 【「協働」場面への目的意識】	○同じ師範を選択した生徒同士をで，節回しや間の取り方，声の音色や発声といった視点をヒントにしながら，何度も模倣して練習させる。また，ポイントをワークシートにメモさせる。 評：節回しや間などの視点をヒントにしながら，師範の演奏に近づけるために意欲的に表現しようとしている（ア－①，観察，ワークシート） ○グループで学び合い，〈長岡甚句〉を地域の方に発信する発表会をもつことを知らせる。 ○師範の良さを見習いつつ，仲間の良さにも学びながら，自分たちのグループの〈長岡甚句〉を目指させる。 ○生徒に新たな視点をもたせる。 ・「音頭一同形式」：グループで音頭取りを交代し歌う。また，囃子方の役割も重要であることを理解させる。 ・歌っている様子を収録したＤＶＤを提示し，「息づかい」や「顔の表情，あごの使い方などを意識させる。 ・グループで歌い方を揃える必要はないことを伝える。 ○ペアを組んで表現を交流し合う場面を何度も設け，次時にグループを組んでみたい相手を探させる。 ○授業中の観察や生徒の意思から，グループを教師が編成し，生徒に提示する。
願いを具現化する　１時間	**表現を高める** ・節回し ・強弱 ・間 ・発音 ・声の音色 ・コブシ ・産字 ・発声　　など	**◎グループで学び合い自分の表現をもっと高めよう。そして一人ひとりの良さを生かしたグループの演奏を創ろう。** **○互いの歌の良さを見出したり，アドバイスを送ったりしよう。** ・不安だったけれど，「うまく歌えている」と言われて自信がついた。 **○互いの良さを生かし，表現をもっと工夫して高めよう。** ・▽▽さんのようにのどで歌うように意識すると良いことが分かった。 ・もっと腹に力を入れて歌ったらおもしろくなった。声に張りが出て，迫力も増したな。	○交流のめあてを提示する。 ○グループで互いの歌を聴き合い，良さを発見して，積極的に伝えるように指示する。 ○グループの交流に介入し，良さを生徒と共に発見したり，言葉で伝える。 ○音色や間，節回しなどを再試行し，より相手に伝わる表現を工夫させる。 ○相手に伝わる演奏を意識させるため，目線や歌い方，表情などの視点を提示する。 評：表現を再試行し，工夫している（イ－②，観察，振り返りカード）
新たな願いをもつ　２時間	**発信し，価値を捉え直す** ・節回し ・強弱 ・間 ・発音 ・声の音色 ・コブシ ・産字 ・発声　　など	**○グループごとに発表しよう。** ・このグループは一人一人が思いっきり声を張り上げていて，力強いな。 ・あのグループは，囃子手の掛け声が明るくて，歌が盛り上がっていていいな。 **○学習を振り返ろう。** ・地域の人に良かったと言われて嬉しかった。〈長岡甚句〉を歌うことで，地域の人とつながることができたと思う。	○工夫された点や良さを聴きとらせる。 評：良さを生かし，より相手に伝わる表現ができているか。また，互いの発表を聴いて，良さを見出しているか。（ウ－①，パフォーマンス課題） ○地域の人を招待し，コメントをいただく。 評：歌の特徴と歴史，文化との関連から〈長岡甚句〉の価値について考えている。（ウ－①，振り返りカード）

２　授業の実際と考察

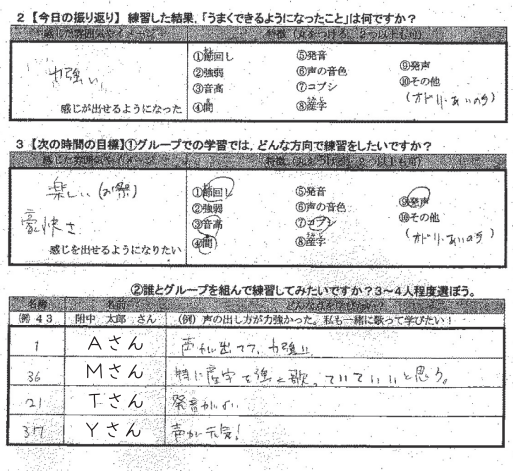
「協働」の場面に焦点を当て，その前後も加えつつ，抽出生徒ＩとＭを中心とした生徒の学びについて，分析と考察を行う。

１）「協働」場面までの様子

練習に入る前に，民謡の特徴として「節回し」「コブシ」「間」などの視点を全体で共有した（１時間目）。その後，同じ師範の演奏を目指す者同士で集まり，模範ＣＤを聴きながら練習を行った（２時間目）。抽出生徒ＩとＭを含めた多くの生徒が節の動きや間の取り方などをある程度把握し，自分なりに歌うことができるようになった。

さらに師範の演奏のように表現豊かに演奏するには，より細かな視点から特徴を捉えることが必要である。そこで教師は，互いの良さや特徴から表現の視点を見出し，共に高め合うグループ活動を構想し，誰と一緒にグループを組んで練習したいかを生徒に問うた。生徒は相手を変えながらペアで歌い合い，それぞれの特徴を感じ取りながら，自らがさらに高めたい視点を明らかにしながら相手を選んだ（３時間目）。以下に，抽出生徒ＩとＭのワークシートを示す。

抽出生徒Ｉ


２【今日の振り返り】練習した結果，「うまくできるようになったこと」は何ですか？

感じが変化したこと	特徴（気をつけること　２つ以上も可）		
力強い 感じが出せるようになった	①節回し ②強弱 ③音高 ④間	⑤発音 ⑥声の音色 ⑦コブシ ⑧産字	⑨発声 ⑩その他 （カトリ・ティのう）

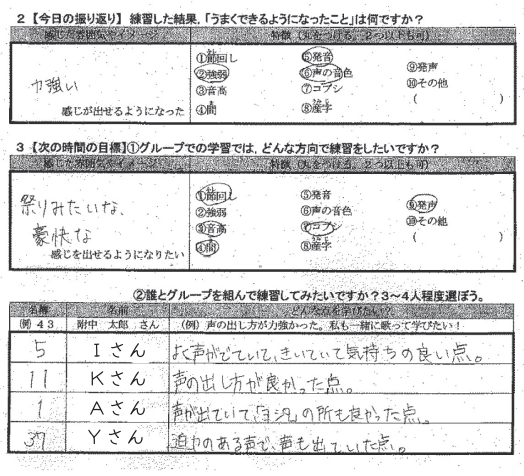
３【次の時間の目標】①グループでの学習では，どんな方向で練習をしたいですか？

感じた変化	特徴（気をつけること　２つ以上も可）		
楽しい（お祭り） 豪快さ 感じを出せるようになりたい	①節回し ②強弱 ③音高 ④間	⑤発音 ⑥声の音色 ⑦コブシ ⑧産字	⑨発声 ⑩その他 （カトリ・ティのう）

②誰とグループを組んで練習してみたいですか？３～４人程度選ぼう。

名簿	名前	どんな点を学びたいか？
例 43	附中　太郎　さん	（例）声の出し方が力強かった。私も一緒に歌って学びたい！
1	Ａさん	声も出てて，力強い。
36	Ｍさん	特に産字で強く歌っていていいと思う。
21	Ｔさん	発音がいい。
37	Ｙさん	声が元気！

抽出生徒Ｍ


２【今日の振り返り】練習した結果，「うまくできるようになったこと」は何ですか？

感じた変化	特徴（気をつけること　２つ以上も可）		
力強い 感じが出せるようになった	①節回し ②強弱 ③音高 ④間	⑤発音 ⑥声の音色 ⑦コブシ ⑧産字	⑨発声 ⑩その他 （　　）

３【次の時間の目標】①グループでの学習では，どんな方向で練習をしたいですか？

感じた変化	特徴（気をつけること　２つ以上も可）		
祭りみたいな， 豪快な 感じを出せるようになりたい	①節回し ②強弱 ③音高 ④間	⑤発音 ⑥声の音色 ⑦コブシ ⑧産字	⑨発声 ⑩その他 （　　）

②誰とグループを組んで練習してみたいですか？３～４人程度選ぼう。

名簿	名前	どんな点を学びたいか？
例 43	附中　太郎　さん	（例）声の出し方が力強かった。私も一緒に歌って学びたい！
5	Ｉさん	よく声がでていて，きいていて気持ちの良い点。
11	Ｋさん	声の出し方が良かった点。
1	Ａさん	声が出ていて「ヨシ」の所も良かった点。
37	Ｙさん	迫力のある声で，声も出ていた点。

抽出生徒ＩとＭは共に，練習の成果として「力強い」感じが出せるようになったと述べている。そして，より目指すべき表現として，「お祭りみたいな」「豪快さ」という共通したイメージをもっている。またＩとＭは，一緒に練習したい相手として互いに名前を挙げている。

これは，目指すべき表現に対して，「自分と他者が共通した願いや目的でつながっていることを感じる状況」である。よって教師は，ＩとＭにＡとＹを含む４名からなるグループを編成した。そして「協働」場面において，互いの特徴や良さを認め合ったり伝えあったりすることと，表現を再試行しながら，「Ｉは産字などの視点に着目して」，「Ｍはより声を出して堂々と歌うように」歌声を高めていく姿を期待し，互いに認め合い，学び合う活動を設けた。以下，「協働」場面の実際を述べる。

２）「協働」場面の実際（Ｉ,Ｍ,Ａ,Ｙは生徒，Ｔは教師）

①　前半

発話記録	分析
グループ内でペアを組んで交互に歌い，良さを伝え合う場面 01Ｔ：まずはグループの中でペアを組んで，歌い手と聴き手（囃し手）に分かれて歌い合ってみよう。その時，聴き手は「こんなところ良かったよ」というのをコメントで返してあげて。「強弱」などいろんな視点から勉強してきたから，そういう視点で話ができるといいね。 【グループでペアを組む。Ｙが歌い手,Ｍが聴き手（囃し手）。歌い終わった後交代】 02Ｙ：（Ｍの歌は）声が力強くてよかった。 03Ｍ：（Ｙの歌は）うん…なんかね～良かった。 【ペアを替える。Ｙが歌い手，Ｉが聴き手（囃し手）】 04Ｉ：（拍手） 05Ｉ：広がりがあっていい。 06Ｙ：ありがとー。 07Ｉ：こんな感じで…（と手を波打って見せる）分かる？ 08Ｙ：うん。 【Ｉが歌い手，Ｙが聴き手（囃し手）】 09Ｙ：うんとねー，Ｉちゃんはねぇ，すごくね，声がねー，発音？いや，音色が良かった。音色もいいし，声の発音も…たぶん。 10Ｉ：（笑顔でうなづく） 【ペアを替える。Ｉが歌い手，Ｍが聴き手（囃し手）】 11Ｍ：（拍手） 12Ｍ：声もちゃんと出てて，あと，発音もいい感じでした。 13Ｉ：（笑顔でうなづく） 【Ｍが歌い手，Ｉが聴き手（囃し手）】 14Ｉ：（拍手）。 15Ｉ：うんとねー，強弱とね，産字が聴こえてきて，良かったよ。 16Ｍ：（笑顔で相槌を打つ） ※以下省略 それぞれの良さについてグループで交流する場面 ※前半部分は省略 56Ａ：Ｍちゃんって声低いよね…。 57Ｙ：うん，聴きやすい。 58Ｉ：迫力があるよね。 59Ｙ：そうね…。 60Ａ：うん，かっこよかった。 61Ｍ：えー，やだ…低いのイヤ…。 62Ｉ：「ハァーエー」（と低い声で，旋律を揺らしながら歌って真似する） 63Ｙ：Ｉちゃんのその声ってどうするの？ 64Ｍ：ビブラート…。 65Ｉ：うん，ビブラートをかけるみたいな…「ハァーエー」（と手を揺らしながら歌う） 66Ａ：えっ，ビブラートってさぁ，上と下をだんだん早くするんでしょ？（と顔を揺らしながら歌ってみる）	01：音頭取りの囃子の意識付けを行い，相互に分かれて歌うことを指示する。 02,03：相手の声の良さ（力強さなど）について伝えている。 04,05,07：Ｉは相手の節回しの特徴などを発見し，身振りや態度，言葉で伝えている。 06,07,08：友だちの評価により自分の声を肯定的に捉えている。 09：相手の良さ（発音，音色）を伝えている。 10：自分の声を認められて嬉しい様子である。 11,12:Ｍは相手の良さ（声量，発音）を言葉や態度で伝えることができた（03との違い）。 14,15：Ｉは積極的に相手の良さ（強弱，産字）を態度や言葉で伝えている。 16：自分の歌い方の良さを認められている。 02～16：01に関係するが，相手に囃してもらうことが，互恵的な学びを生みだしている。 56～60：Ｍは自分の声が低いことについて否定的に捉えているが，周りの生徒は「かっこいい」と価値付けている。 63～66：ＹはＩとの交流を通して，発声の仕方について関心をもち，Ａから「音を上げ下げする」という技術的なアドバイスを得ている。

教師が歌い手と囃し手に分けて，「囃す」ことを促したこともあり（01），生徒の間に互恵的な学びが生まれている。授業記録からその様子を観察する限り，「囃す」こと，「囃される」ことが，生徒相互に良い人間関係を作りだしているものと思える。互いの表現を肯定的に受け止め，自分の声の良さや特徴を認識している姿が見られる（02 ～ 16）。

相手への気付きは，力強さ（02），発音・音色・声量（09,12），強弱・産字（14,15）など具体的である。当初大まかな指摘しかできなかったＭ（03）も，強弱や産字といった言葉がでるようになった（15）。後半では，ビブラート（コブシ）といった技術的なアドバイスが出てくるようになった。

56 ～ 60のやりとりでは，自分の声の低さについて否定的に捉えていたＭが，周りの生徒からの肯定的な言葉を受けている。民謡は，自分の声で出しやすい音高から歌い出すことが可能である。こうした民謡の性格がこのような状況を作り出したものと考えられる。

②　後半

「協働」場面の後半では，良さや特徴を発見し伝え合ったり，アドバイスを送ったりしながら，相手に伝

わる表現を目指して音色，間，節回しなどを再試行することで，より表現を工夫する姿が現れているかを，授業記録から分析した。

発話記録	分析
67Ｔ：じゃあ課題を出しますよ。せっかくホワイトボードにいろんな人の良さを書いたよね？「ねぇねぇちょっと教えて！」って言っても良いから，これから３分間個人練習をしよう。で，「今の自分の歌い方よりも，ここを工夫したい」とか「だれだれさん，産字が良かったからちょっと教えて」というように，今よりもちょっと深めるポイントを大事にして，自分で３分間，表現を工夫することを練習してみよう。３分後に，もう一度グループで歌ってみよう。その時，「おっ，良くなったね」と言われたら嬉しいよね。ではホワイトボードを見て，何を（追求）しようか考えてみよう…はい，それでは個人練習スタート」 【各自で個人練習をする。Ｉが一回歌った後】 68Ｉ：産字…疲れる…（と言いながら，ワークシートに産字を加筆している） 69Ｉ：（隣の人の声を聴いて）強弱もやりたい！（とつぶやいて，もう二度歌う） 70Ｉ：ねぇ，なんか私ここ低くない？（と「ハァーエー」の部分を歌いながら周りに尋ねる） 71Ｙ：それがクールなの，クール！（と言いながら肩をたたいて認めている） 72Ａ：（「ハァーエー」とＩに歌って聴かせる） 73Ｉ：えっ？もう１回！ 74Ａ：（もう一度歌う） 75Ｉ：（自分で歌って試す） ※中略 80Ｔ：自分たちで練習したよね。じゃあグループでさっきみたいに１番，２番，３番，４番の順で歌い継いで行ってみよう。ここ良くなった、ここ変わったよ，というのを，歌い終わったら言ってあげるようにしよう。ではやってみよう。 【最初にＭが音頭取りで歌う。仲間が囃す】 81Ａ：産字があって，迫力があって…強弱があって… 82Ｙ：（うなづいている） 83Ｉ：産字ができるようになりたいんだけど… 【次にＹが音頭取りで歌う。仲間が囃す】 84Ｉ：なんかねー，音がなんかいい感じ…きれい。 85Ｙ：発声がいい。 86Ａ：発声がうまい。 【次にＩが音頭取りで歌う。仲間が囃す】 87Ａ：がんばっている感じが伝わってきます…。 88Ｙ：頑張っている感じがすごくいいよね。 89Ｍ：伸ばすのがきれい（と手ぶりを加えて伝えている） 90Ａ：音がずれていない。 91Ｉ：ずれてるずれてる…（と謙遜）ずれていなかった？（とＡに確認）←自分がさっき気になって低くないか尋ねていたところ 92Ａ：ずれてない。 【次にＡが音頭取りで歌う。仲間が囃す】 93Ｍ：声がいい。 94Ｙ：うん，声がきれい。 95Ｔ：とっても良くなった。少し変わってきた。あと１分だけ個人練習しよう。そして，最後にもう一度歌い合わせてみよう。 （個人で練習をする　Ｉはワークシートを見ながら，息の流れを大切にして節を歌っている） 96Ｉ：（首をかしげてもう一度歌う「かしわのごもんー」を精一杯引き伸ばして歌っている） 97Ｔ：息の流れを大切にして歌っているんだね。それとっても大事なことだよね。あんまり他の人が意識していないことなんだけど，音楽の流れとしてすごい大事な視点だね。息を上手に使っていけるといいよね…。 98Ｉ：（もう一度歌う）うーん，無理…息が続かない…。 【グループ皆で歌い合わせる。】	68,69：Ｉは他の生徒との交流を通して，産字や強弱の視点にこだわって練習をしている。 70,71：Ｉは節の音高について問題提起をしているが，Ｙは声質の良さとしてＩの歌声を価値付けている。 72～75：IはＡの出だしを気に入って，Ａに歌ってもらい自分で練習を繰り返している。 80：順番に歌を回して歌い合うことを促す。 81～94：80の指示により，グループ内で次から次へと歌が回る。音頭取りの歌に周りが囃し，友好的な雰囲気が生まれている。 81～83：良さ（産字，迫力，強弱）を見つけて伝え合っている。 68,83：Ｉは産字をこだわり続ける。練習を通してこだわってきた産字について，自分もＭのようになりたいという憧れを抱いている。 84～86：良さ（音色，発声）を伝えている。 87～92：良さ（努力）や特徴（声の伸ばし）を伝えている。 91,92：Ｉは70で気になったところについて相手に尋ねることで，自分の表現がうまくいっているかどうかを確かめている。 93～94：良さ（音色，発声）を伝えている。 96,97,98：Ｉは産字を生かした表現を工夫するため，息の流れを意識して歌っている。教師がその姿を価値付け，本人の追求の方向を示している。

教師は生徒の表現を深めるために，互いの歌声の特徴や良さをホワイトボードに可視化させ，表現の視点をもたせながら練習するように働きかけた（67）。その結果，仲間の良さを取り入れてさらに工夫を加えている姿が表出した。具体的には，産字や強弱の工夫（68,69,81），音色や発声の良さ（71,85,86,93.94），声の技法（89）あるいは，友だちの努力に対する称讃（87,88）である。

特にＩは産字の表現について，Mの歌声から具体的なイメージをもち（15），息の使い方をあれこれ試行している（68,83,96）。また，自分の表現が良くなっているかどうかについて，相手に確認しながら練習を進める姿も見られた（91,92）。

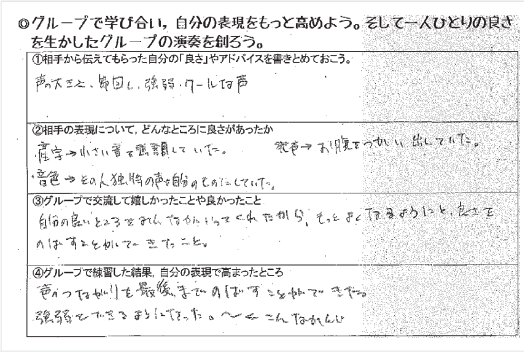
「協働」の場面が，さまざまな視点から試行錯誤を重ねながら練習に取り組む姿を生みだし，仲間の表現の良い所を見つけるとともに，それを自身の表現の工夫につなげ，新たな表現の仕方を身につけたりしている姿が表出したと言える。

また，順番に歌を回すという教師の指示（80）により，音頭一同形式による民謡の特性が生かされ，グループ内では次から次へと歌が回り，囃され，友好的な雰囲気が生まれていた。

３）「協働」場面後の様子

「協働」場面後，教師は本時の学習を振り返って学んだことや感じたことをワークシートに記述させた。以下は抽出生徒ＩとMが記述した内容である。

抽出生徒Ｉ


◎グループで学び合い，自分の表現をもっと高めよう。そして一人ひとりの良さを生かしたグループの演奏を創ろう。

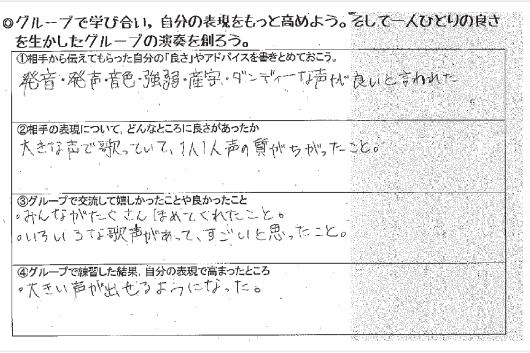
①相手から伝えてもらった自分の「良さ」やアドバイスを書きとめておこう。
声の大きさ、息づかい、強弱、クールな声

②相手の表現について，どんなところに良さがあったか
産字→小さい音を強調していた。　発声→お腹をつかい出していた。
音色→その人独特の声の色のようにしていた。

③グループで交流して嬉しかったことや良かったこと
自分の良いところをみんなからほめられたり，もっとこうしたらいいよとアドバイスをもらったこと。

④グループで練習した結果，自分の表現で高まったところ
声がつながり，最後まで伸ばすことができた。
強弱をつけることができるようになった。〜〜こんなかんじ

抽出生徒M


◎グループで学び合い，自分の表現をもっと高めよう。そして一人ひとりの良さを生かしたグループの演奏を創ろう。

①相手から伝えてもらった自分の「良さ」やアドバイスを書きとめておこう。
発音・発声・音色・強弱・産字・ダンディーな声が良いと言われた

②相手の表現について，どんなところに良さがあったか
大きな声で歌っていて，1人1人声の質がちがったこと。

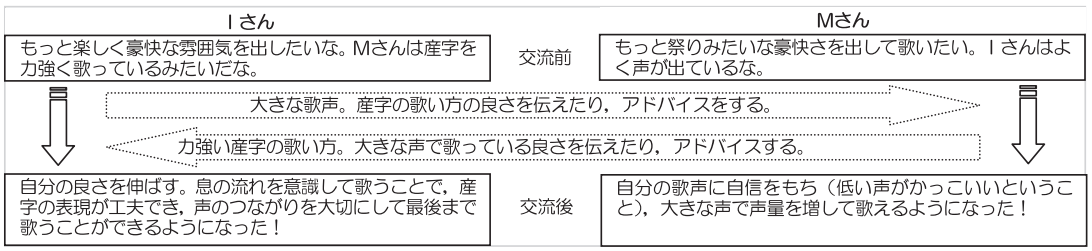
③グループで交流して嬉しかったことや良かったこと
・みんながたくさんほめてくれたこと。
・いろいろな歌声があって，すごいと思ったこと。

④グループで練習した結果，自分の表現で高まったところ
・大きい声が出せるようになった。

Ｉは「協働」場面前にMの歌い方から産字に着目し，その良さを学びたいと考えていた。この振り返りではMの歌い方を聴き，その良さや特徴を考えることで，産字を歌う際には「小さい音を強調」することが大切であることを認識することができた。その結果，発声や音色にも着目しながら「声のつながりを意識して最後まで伸ばす」ことができるようになったと述べている。それは，発話記録でも見られたように，息の流れを意識して練習した成果であると考えられる。

また，Mは「協働」場面前にＩのよく声が出ている姿に着目していた。当初から，自分の声が低いことを気にしており，さほど堂々と歌う姿が見られなかった。しかし，グループで互いに聴き合う活動を通して，相手から「ダンディな声」「かっこいい」とほめてもらったことが嬉しかったと述べている。その結果，「大きな声で歌えるようになった」と表現の高まりを実感しており，自分の声に自信をもった様子がうかがえる。

このことから，抽出生徒がこれまで行った学習活動における互恵関係をモデル化すると以下のようになる。



また，他の生徒も含め学級全員が，本時で交流した相手の表現について，何らかの良さを発見し挙げていた。そのうち複数の視点から良さを述べている生徒が34名（総数は41名）にのぼった。これは，多くの生徒が様々な角度から表現を聴き取っていたと言える。

さらに表現の高まりについては，コブシや声量，発声の仕方など視点は様々であるが，全員が良くできるようになったとの実感を述べていた。また，「自信をもって歌えるようになった」との記述も見られた。相互交流の場面において，互いの良さを見出して伝え合うことで，互いに学び合ったり，自分の歌声や表現に対して肯定的に捉えることができたりした様子が伺える。

4）題材終末までの様子

「協働」場面を経て，生徒はさまざまな視点から自らの歌い方に工夫を加えて表現できるようになってきた。また，自分の歌声に自信をもち，堂々と歌う姿勢が多く見られるようになった。そこで教師は，地域で〈長岡甚句〉を歌っている方々を招いて，聞いていただく場を設定した。このことにより，生徒は練習の成果をよりうまく表現しようといっそう意欲を高め，発表会に向けて練習に励んだ。

発表会当日は４名の方々が来校し，各グループの発表を聞かれた。その中で，「たいへん上手い」「一生懸命〈長岡甚句〉を歌っている姿に感激した」というお褒めの言葉を多くかけてくださった。また，「語尾をすこし上げると民謡らしくなる」など，具体的な技術面のアドバイスももらうことができた。その後，地域の方々の生演奏を披露していただき，より細やかな節回しやコブシの入れ方などの表現技法を学ぶことができた。

題材を終えて，抽出生徒ＩとＭは振り返りシートに以下のように記述した。これに，ＮとＲの振り返りシートを補足的に加え，彼等の学びについて分析・考察する。

抽出生徒Ｉ

題材の振り返りシート　1年 1組　番氏名

① 今回は，仲間の声を聴き合って良さを見つけあう学習をしました。どんなことを感じましたか？

また自分たちのことや，できないことを，仲間の良さから，見つけ自分に生かすことができよかったと感じました。
また「すごい！」と思えることを，見えてきました。仲間の声をきいて

② 「長岡甚句」を学習したことで，長岡や郷土について考えたり感じたりしたことはありますか？

長岡についてのことが，そのまま歌詞になっていて，その歌を聞いただけでも，長岡のことについては知ることができると思いました。

③ 「節回し」や「コブシ」，「音色」，「発声」など，さまざまな表現の視点について学びました。
(1)特に自分がよくできるようになった表現の視点はどこですか？

発音，節回し，間

(2)民謡の表現について考えたり感じたことはどんなことですか？

自分自身のよいところを，生かして歌えることです。民謡は，だれかの真に合わせる（合唱）ような感じではないからそこをだせると思います。

④ 地域の方から評価をいただきました。感じたことや考えたことはどんなことですか？

私たちは，声のいりかあまりないと言われたので，「いり」は大切なんだと思いました。いりがあると，ちいんさがいい感じになるし，歌ってても，ちがよくなりました。

⑤ 「長岡甚句」の良さや価値にはどんなことがあると思いますか？

〈良さ〉
おぼえやすくすぐ，なかが歌える！

〈価値〉
長岡の伝統があり，次の世代にも歌われてる！

抽出生徒Ｍ

題材の振り返りシート　1年 1組　番氏名

① 今回は，仲間の声を聴き合って良さを見つけあう学習をしました。どんなことを感じましたか？

みんなが自分の声をしっかり生かして歌っていたから，すごいと思いました。
Ａさんの，声が，大きくて，発音も良かったので，すごいと思いました。
Ｉさんも，声がよく出ていて，音色がきれいだったので，私も，マネしていきたいです。　Ｙさんは，クールな声で，声を出ていて，良かったー。と思いました。

② 「長岡甚句」を学習したことで，長岡や郷土について考えたり感じたりしたことはありますか？

長岡を代表する，長岡甚句は，前は，「なんか聞いたことあるなぁー」ぐらいにしか思っていなかったものの，この学習を通して，ずっと歌いつがれてきた，伝統のあるものであることを知り，この先も，ずっと，歌いつがれるといいと思います。

③ 「節回し」や「コブシ」，「音色」，「発声」など，さまざまな表現の視点について学びました。
(1)特に自分がよくできるようになった表現の視点はどこですか？

コブシで，「ハ～エ～ン」みたいな感じに意識することができるようになった。

(2)民謡の表現について考えたり感じたことはどんなことですか？

コブシや，節回しなど，独とくな表現があり，それがあることで，その地域の特ちょうなどを，よく表すことができる，ということが，改めて良く分かりました。

④ 地域の方から評価をいただきました。感じたことや考えたことはどんなことですか？

自分では，できているつもりだった，「コブシが足りない」ことを注意してもらったので，もっと意識しないといけないんだなぁと思いました。地域の方の歌は，迫力があって，すごかったです。

⑤ 「長岡甚句」の良さや価値にはどんなことがあると思いますか？

長岡甚句には，長岡の特ちょうと言えるものなどが歌詞に入っていて，良いと思います。長岡甚句だけでなく，他の民ようにも，歌詞にその地域の良さや，生活の様子などが入っていて，おもしろいと思います。（こきりこ節など）

抽出生徒N

題材の振り返りシート　1年 1組 番氏名

① 今回は，仲間の声を聴き合って良さを見つけあう学習をしました。どんなことを感じましたか？

一人目は節回しが上手で，二人目は産字が上手なので，一人一人が，上手なところは違うが，皆で歌，たり，「人目を2人目が聴いて，良いところを取り入れることも，をすれば，多分皆が上手になれると思った。又，一人でやるよりは，良さを見つけがれる皆でやる方が，自分も他の人も上手くなれると感じた。

② 「長岡甚句」を学習したことで，長岡や郷土について考えたり感じたりしたことはありますか？

長岡甚句は，長岡の歴史や，有名なところを歌，た歌で，このように，歌で物事を伝えることは，素晴らしいと思った。なので，この歌（長岡甚句）の中に込められたもので，受け継ぎ，広めたい。また，長岡について，甚句は いつ頃に出来たのかを知る為に，郷土のことをもっと調べたい。

③ 「節回し」や「コブシ」，「音色」，「発声」など，さまざまな表現の視点について学びました。

(1)特に自分がよくできるようになった表現の視点はどこですか？

産字　（特に「かしきのごもん～」のところ）

(2)民謡の表現について考えたり感じたことはどんなことですか？

普通の音楽（歌）と違って，テンポが一定でないと感じた。それは，その地域独特なものであり，自分たちの歴史を，表現に込めたものだと思った。自分でもテンポが不規則だと，何故か歌いにくいと感じた

④ 地域の方から評価をいただきました。感じたことや考えたことはどんなことですか？

「上手の一言です」と言ってもらえて，嬉しかった。しかし，「は～ねえ～」のところを，棒読みしているので，もっと高低をつけた方が良いという意見をいただいたので，これを踏まえて，もう少しやってみたいと思った。（授業で出来たか，たら教で）

⑤ 「長岡甚句」の良さや価値にはどんなことがあると思いますか？

まず良さは，他の民謡と比べて，とても高低があり，まるで踊っているような感じがするところである。また，自分なりには，他の民謡よりも多い表現が使われている（師範によって変わるが）と思った。価値としては高いと思う。理由は，今まで受け継いできた人の気持ちが込められていると思うからである。

抽出生徒R

題材の振り返りシート　1年 1組 番氏名

① 今回は，仲間の声を聴き合って良さを見つけあう学習をしました。どんなことを感じましたか？

グループをつくって仲間の声を聞いていると，1人目は音色がきれい，2人目はコブシがきわだっていると，普段はあまり聞き慣れていない民ようでも，努力次第で，自分なりの個性が生きてくると思った。また，仲間の良さを見つけたり，その良さを自分で取り入れたりと，どんどん改良してより良い物ができると思った。

② 「長岡甚句」を学習したことで，長岡や郷土について考えたり感じたりしたことはありますか？

「長岡甚句」は，毎年地域の行事などで何気なく踊っていたけれど，今回の学習で始めて真剣に向き合うと，歌詞が日頃の生活のことを示しているのが分かった。そして「長岡甚句」を作った人々は，当時の様子を後世に伝えようとしたのだろうかと思った。

③ 「節回し」や「コブシ」，「音色」，「発声」など，さまざまな表現の視点について学びました。

(1)特に自分がよくできるようになった表現の視点はどこですか？

コブシ

(2)民謡の表現について考えたり感じたことはどんなことですか？

先にも述べたように歌詞は日常的な物が多いと思う。また，歌う時は音を揺らしたり，語尾を上げたりなど，現代の歌にはない表現があって，面白いと思った。

④ 地域の方から評価をいただきました。感じたことや考えたことはどんなことですか？

最初に比べては凄く上手くなったと思うが，まだ地域の人には及はないと思った。まだ上手くできなくても，機会があれば練習していきたいと思った。そして，今ではあまり用いられなくなった民ようでも，真剣に向き合い人に伝えようとする人がいるということを感じた。

⑤ 「長岡甚句」の良さや価値にはどんなことがあると思いますか？

やはり，歌詞を通して当時の生活が分かることだと思う。また，現代の生活では見出されない民謡独特の口ずさむ，歌い方が分かることも良さだと思う。けれど，1番は，「長岡甚句」を通して地域の人々と色々な交流ができることだと思う。これからは，地域の行事があったら，地域の人々と「長岡甚句」を通して様々な話をする貴重な機会だと思って，実行してみたい。

・仲間の声の良さを認めることから始まる。

個々の生徒は，仲間の声を聞き，その良さを認めつつ，自身の声を生かした個性的な表現をしようとしている。「声が出ていて音色がきれい」「クールな声」（M）といった声に対する評価や「すごい！」（I）といった感動から，「良さを自分で取り入れ」「どんどん改良して良いもの」（R）を創りあげていった。「自分に足りないところやできないことを仲間の良さからみつけ自分に生かすことができた」（I），ことを実感している。

・自分自身の声を受け入れ，その特性を生かした歌う。

自分自身の持っている声がそのまま「個性的」で「良い状態」であることと受けとめ，「自分の声をしっかり生かして歌」（M）い，「努力次第で，自分なりの個性が生きてくる」（R）ことを学びつつ，それぞれの〈長岡甚句〉として表現できた。

・仲間や地域の方から具体的な表現方法を学び，それをもとに自らの表現の工夫に生かし，民謡の歌い方の特徴を身に付けている。

「発音，節回し，間，コブシ，産字」などの民謡に特徴的な表現に気付き表現技法を伸ばした実感をもっている。また，「音を揺らしたり，語尾を上げたりなど，現代の歌にはない表現があって面白い」（R）といった記述からは，民謡の特徴的な表現方法やその価値に気付いていることがわかる。

・郷土の民謡の良さや価値に気付いている。

「この歌を通してずっと歌いつかれてきた，伝統のあるものであることを知り，この先も，ずっと歌いつがれるといいと思います」（M）「長岡甚句には長岡の特ちょうと言えるものが歌詞に入っていて良いと思います」（M）「今まで受け継いできた人の気持ちが込められている」「自分たちの歴史を表現に込めたもの」（N）などの記述に見られるように，〈長岡甚句〉と地域の歴史･文化とのつながり，歌い継ぐ人々の思いを理解し，その価値に気付いている。

・地域の伝承者とのつながりが生まれる。

「地域の方の歌は，迫力があってすごかった」(M)，「『上手の一言です』と言ってもらえて嬉しかった」(N)，「真剣に向き合い人に伝えようとする人がいる」（R）などの記述からは，地域の歌い手の上手さの発見と尊敬の念を抱き，伝統継承への思いを受けとめるとともに，心のつながりを感じていることがわかる。

５）地域の伝承者の反応

授業後，お招きした地域の方々からは以下のような手紙を寄せていただいた。

> 先日の感動を思い出す度に，今までいろいろな所へ訪問し，いっしょに唄ったり踊ったりした喜びや満足がいかに小さいものであったか，自己中心のひとりよがりの趣味であったかが反省させられ，今回の貴校での体験こそ，今までの集大成であったと，生きていて良かったと，一同，会うたびに語り合っております。本当に二度とない体験をさせて頂き，感謝に耐えません。
>
> （中略）音楽室に入ると，不安はふっとびました。不安どころか，私共の方がぐんぐんと雰囲気に吸い込まれていきました。（中略）私はあの授業の中での生徒さん一人一人の真剣な歌い方を聴いて，地域の民謡を教えている先生方から聴いてほしいと思いました。テクニックや上手さなど，（民謡の）コンクール用とは全く異なった，それこそ地域で生きてきた温かさ，そしてみんなが出る声で楽しんで唄う唄こそ大切な文化だと思います。（後略）

「趣味」であった民謡の活動が中学生との交流において「集大成」といえるほどの意味を持つようになったことがうかがえる。そして民謡の意義として，「みんなが出る声で楽しんで唄う唄こそ大切な文化」であることを再認識されている。生徒の〈長岡甚句〉への取組が，地域の人の気持ちを動かし，民謡を歌い続けることへに新たな価値を見出しているといえる。

３　実践を振り返って

これらのことから，以下のような学びがあったと考察する。

- 師範や地域の方々，仲間の演奏を聴く活動を通して，〈長岡甚句〉の歌い方や表現の仕方などの特徴に関心を向けて聴く。その結果，コブシや節回し，発声などの要素について知覚し，それによって生みだされる雰囲気を感じ取る。
- 互いの歌声を聴き合って良さや特徴を伝えあったり，地域の方とのかかわりの中から肯定的な言葉をいただいたりしたことで，自分の声や表現を肯定的に捉え，自分のもつ声の良さを生かした表現に取り組む。
- 表現を再試行したり地域の人々に演奏を発表したりすることで，音色や間，節回しなどの視点から工夫を加え，より適切な表現の仕方を身につけていく。
- 〈長岡甚句〉の成り立ちを学んだり，地域の方々との交流を通したりすることで，郷土への理解が深まると共に，そこに暮らす人々の想いや願いを知り，愛情や愛着をもつ。

本実践では，「協働」場面を通して互いの良さを認め合い，伝え合うことで自己の表現に自信をもつ姿や，相手から学ぼうとする姿が見られた。それには，生徒が互いに共通の願いや目的でつながっていることを実感する状況において，相手の表現を肯定的に受け止め，相乗効果でより良いものを創りだそうとする姿勢が不可欠であるといえる。その姿勢は，教師の働きかけや，民謡のもつ特性（一人一人の歌声や表現が尊重される）から生まれると推察される。

Ⅲ　成果

郷土の民謡〈長岡甚句〉の学習における価値としてあげた３点を中心に，実践の意義と教材性についてまとめる。

① 自分や友だちの声の良さに気付き，自分のもつ声を生かして歌う。

自分の持つ声，話し声を基本として歌い表現することついて，生徒は〈長岡甚句〉の学習を通して学び，その良さを実感することができた。複数の音源による提示から，それぞれ個性的な声の出し方を認めた生徒は，「力強い声」(02Y)，「広がりのある声」(05Ⅰ)，「音色が良い」(09Y）など，仲間のもっている声の良

さを認めている。中でも声の低いMに対して，低いという事実を指摘しつつ「聴きやすい」（57Y），「迫力がある」（58Y），「かっこよかった」（60A）などのように肯定的に受けとめ価値付ける。これにより，Mも自信をもって歌に取り組み，「協働」場面の後のワークシートには，「大きな声が出せるようになった」自分を評価している。

また，Mは，同ワークシートにおいて，「いろいろな歌声があって，すごいと思った」と記述し，さらに題材の振り返りシートにおいて「みんなが自分の声をしっかり生かして歌っていたから，すごい」と思ったと感じている。

このように〈長岡甚句〉の学習を通して，自分の声，友だちの声それぞれの良さに気付き，それを生かして歌うことの良さについて学んでいることがわかる。

それぞれの個性的な声を認め，生かして歌うのは，民謡のもつ性格であるが，これは，民謡の持つ教材性とも言える。

② 異なる様式の表現方法を追求し，伝統的な歌い方としての民謡の表現を学ぶ。

授業を通して，生徒は民謡の特徴的な歌い方を学ぶことができた。

３時間目までに，言葉の発音や声の音色（09Y，12M），産字（15Ⅰ），ビブラート（コブシ）などの歌い方の特徴に気付いた生徒は，４時間目では，仲間の表現の良さに学びながら，具体的な表現の工夫に懸命となる（68Ⅰ～94Y）。そして，結果として民謡の歌い方を習得していく。「協働」場面⑤のMのワークシートでは「発音・発声・音色・強弱・産字・ダンディーな声が良いと言われた」こと，Ⅰは「声の大きさ，節回し，強弱，クールな声」を評価されたことが記述されている。また振り返りシートにおいてもコブシや産字，発音，節回しなどについて，できるようになったことが明記されている（Ⅰ，M，N，T）。

こうして見た場合，民謡の学習は，伝統的な声の表現を学ぶだけでなく，普段比較的多く歌う合唱曲などとは異なる様式を受け入れ表現していくものと言える。すなわち，自分にとっての新たな価値として身体に染み込ませるものである。これは，加藤（1993,p.35）の言う民謡の教材性のうち「音楽性の覚醒」につながるものであるが，伝統的な歌い方の理解と共に，音楽に対する複数の見方，価値観を獲得することもまた民謡のもつ教材性ということができよう。

③ 郷土の民謡としての〈長岡甚句〉の良さを捉え直し，発信する。

〈長岡甚句〉を歌い，伝承者と交流する中で，民謡が伝えるもの，民謡を歌うことにより伝わるものを実感的に学んでいる。題材の振り返りシートによれば，民謡には「地域の良さや生活の様子」が表現されていること（M），歌は「自分たちの歴史を表現に込めたもの」（N）であることなどが述べられている。また，「この歌に込められたものを受け継ぎたい」（N）「この先もずっと歌いつがれるとよい」（M），「伝統があり，次の世代にも歌われてる」（Ⅰ）といったように，自分たちにとって価値あるものとして伝える気持ちも生まれた。さらに，「上手の一言ですと言ってもらえて，嬉しかった」（N）「真剣に向き合い人に伝えようとする人がいる」（R）「〈長岡甚句〉を通して地域の人々といろいろな交流ができる」（R）からは，文化を伝える人々とつながる感覚や交流の意識が芽生えていることがわかる。

郷土の民謡の学習において基盤となるのは，音楽を自分自身との関係において見つめ直す作業である。そこに営まれている（営まれてきた）音楽を聴き，感じ，考え，理解することを通して，音楽につながる自分の存在を再認識することである。このことにより「自分につながる人々と音楽との関係性への気付き」，「自分自身につながる音楽と他の人々の音楽を相対化して観る能力の形成」，「伝統性への気付き」，「郷土に根ざした音楽性の覚醒，伸長」といった成果をもたらす（伊野 2003,p.163）が，本実践の成果もここにつながっている。

以上，実践の意義と教材性について考察したが，これらの他に浮かび上がってきた実践の意義を２点指摘して本稿を閉じたい。１点目は，授業構成における「協働」の場面の有効性について，２点目は，音頭一同形式の音楽教育的観点からみた効果についてである。

④ 授業構成における「協働」の場面の設定は民謡学習に有効に働く。

Ⅰ-1-3あるいはⅡ-1-4)-④で述べた「協働」の場面の有効性について述べたい。本実践は，先行研究に学びながら，師範の演奏に「浸る」→「模倣」→「協働」（交流･表現の工夫）→「振り返り」の授業構成とした。これはすでに紹介した通りである。授業では，同じ師範を選択した生徒同士がグループとなり，師範の演奏

に近づこうと試みる。その際「協働」の場面が意識的に設けられるが，この「協働型学習」が民謡の特徴と相乗効果を生み，生徒の学びの成果をあげていた。それは具体的には，個の声を生かして歌うことと民謡の特徴を把握して表現する活動において顕著であった。前者の場合，３つの師範を聴き，３人３様の声があることを学んだ生徒は，「協働」の場面において，仲間の声そのもののよさに気付き，それを認め，そこから歌を練り上げようとする。典型的なのは，56Ａ～61Mである。ここからは，声が低いというMの特性を認める仲間の姿やそれによって自分の持つ声に自信をもち，それを生かして歌おうとするMの様子がうかがえる。また，師範の歌い方から民謡らしい声やコブシや産字などの表現方法を知った生徒は，グループのそれぞれが得意な技法をもっていることを見つけ，それを真似ながら自分のものにしようと試みた。68Ｉ，69Ｉ，81Ａ，83Ｉ，85Ｙ，86Ａ，89Mなどは，こうした例である。そしてこの学習は，互恵的な関係性の中，87Ａや88Ｙのように，仲間を認め称讃することにより進んでいく。

師範の演奏に近づきたいという共通の目的を持ったグループの個々の生徒がそれぞれ持っている個性を生かし，またそれぞれに見られた技能のよさやこだわりに気付き自分のものとしていく。「協働」の場面の設定は，こうした学びの姿を具現化していた。民謡の場合，同じ曲であっても様々な歌い方を認めていく。こうした特性を生かして表現に結び付けるという意味でも，「浸る」→「模倣」→「協働」といった本授業の構成，及び「協働」の場の設定は，提案性を持っているといえる。

⑤ 音頭一同形式が，生徒の歌声と気持ちをつなげる。

本実践で顕著に見られたのは，音頭一同形式の良さである。音頭一同形式は，音頭取りの歌に対して一同が唱和していくものであるが，〈長岡甚句〉では，音頭取りが一節歌うと，すかさず一同が「ハーヨシター　ヨシター　ヨシター」と入る。そしてまた，音頭取りの部分となり，歌の後半は，一同が一緒になって歌い上げるといった形となっている。

授業は,「囃す」ことの意識を促す教師の指示により（01Ｔ),音頭取りの歌をさかんに囃しながら進行した。「囃すー囃される」「音頭取りが1人で歌うー全員が唱和する」の繰り返しの中で,歌い手相互の心がつながり,歌はさらにエネルギーを増していく。こうした好循環が生まれ互恵的な学びを触発していた。また，授業の後半80Ｔからは，音頭取りを交代しながら次から次へと歌が回っていく。

このように音頭一同形式を音楽教育的な側面からまとめると次のような意義を認めることができる。

・個を生かす：自分自身の声を生かした歌い方を回りが認めていく。「私は私でいい」といった状況を生みだす。

・全体は個を必要とする：個は全体と一体化してはじめて一つの音楽となる。「あなたに声と息と心を合わせよう」といった状況を生みだす。

・一人ではできない：仲間の共感なしには，成立しない音楽である。

民謡や民俗音楽が本質的にもっている人とつながる力は，音楽科の授業に活力を与えるだろう。

以上，郷土の民謡学習の意義と教材性について，実践を通して考察してきた。実践の成果を今後につなげていきたい。

【参考文献】

伊野義博（2003)「郷土の音楽ーその特性と教材性」『学校音楽教育研究 第７巻』日本学校音楽教育実践学会，pp.154-165

伊野義博（2007)「民謡の教材性と授業プラン～長岡甚句を例に～」『新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要 第６号』pp.55-82

伊野義博（2010)「我が国や郷土の伝統音楽を授業で扱う具体的な方法論」『季刊 音楽鑑賞教育 Vol.2』音楽鑑賞教育振興会，pp.18-23

奥倉幸作（1982)『長岡甚句の由来』（私家版）

桂博章（2000)「日本民謡の指導法について一非常勤講師による指導を組み入れた授業実践例を中心に一」『秋田大学教育文化部教育実践研究紀要第22号』pp.23-30

加藤富美子（1993)「日本の民俗音楽による教育実践の動向－主要雑誌等にみる最近20年間の実践報告より－」『民俗音楽研究 第13号』日本民俗音楽学会

垣内幸夫･笠松洋子（1991)「学校教育における民謡教材の可能性～『斎太郎節』の授業を通して考えること～」『民俗音楽研究第10号』日本民俗音楽学会，pp.19-27
小島美子（1991）『歌をなくした日本人』音楽之友社
新潟大学教育学部附属長岡校園（2014）『文部科学省研究開発指定 幼・小・中一貫教育研究 社会的な知性を培う 第２次研究 第１年次』
西尾実，岩淵悦太郎，水谷静夫編（1988）『岩波国語辞典第４版』岩波書店
日本放送協会（1992）『復刻 日本民謡大観 中部篇（北陸地方)』日本放送出版協会
柳田國男（1981）「郷土研究の将来」『定本柳他國男全集 24巻』筑摩書房，初出1931
山内雅子，伊野義博，剣持康典，津田正之（2014）「座談会『我が国の音楽』の指導の充実にむけて」『初等教育資料 11月号』文部科学省，pp.60-65

【使用音源・映像】

（ＣＤ）長岡市民謡連盟 長岡市民謡連盟10周年記念〈長岡甚句〉
（ＣＤ）北島三郎『長岡大花火音頭』（C/W 長岡甚句）CDP-839
（ＤＶＤ）新潟大学大学院教育学研究科音楽教育専修(2008)『ＤＶＤで歌える!踊れる!? 長岡甚句』